

グローバル・パワーの狭間から

板垣 竜太

南川文里が書いた本誌前号（第3号）の巻頭言のタイトルは「バックラッシュの嵐に抗する場を」だった。何たることか、第2次世界大戦の終結から80年を迎えた2025年の世界は、まさにその表現どおり「バックラッシュの嵐」が吹き荒れることになった。

米国のトランプ政権はその筆頭であり、「私に国際法は必要ない」と豪語するリーダーの旗振りにより、国内外において脆いバランスで何とか維持されてきたものが力によって次々に破壊されている。歴史は彼のような存在を独裁者、現代米国のような対外政策を帝国主義と呼んできたのではなかったか。それをいかに食い止めるかという試みが、近現代の歴史過程で辛うじて積み重ねられてきたのではなかったか。

まさにカール・シュミットのとも言える友敵の論理、法秩序の中断、主権的権力の行使が世界をかき回していく姿は、無数の亜流模倣者を生み出している。「日本人ファースト」を公然と打ち出す政党が躍進し（これまで米軍特権などを除いて「日本人ファースト」でなかったことなどあったらどうか）、いわゆる「高校無償化」制度を拡充するにあたり外国人学校や留学生を支援から除外し（朝鮮学校のみを狙い撃ち的に排除してきた政策をより拡大した格好である）、大学関連でも博士後期課程学生を支援するSPRINGプログラムの支給対象を「日本人」だけに限定すると決めるなど（それでいて「SDGs」とか「ダイバーシティ」とか恥ずかしげもなく強調する）、日本でもその事例は枚挙に暇がないほどである。この文章を書いている目の前では、「国家緊急権」条項を含む改憲推進を堂々と掲げる自民党だけで衆議院議席の3分の2以上を確保するという光景が繰り広げられた。

もっとも、こうした流れに対抗する動きもある。2024年12月3日に韓国の大統領が突如宣布した非常戒厳に対し、大勢の市民が素早く汝矣島^{ヨイド}に駆けつけて軍隊や警察から国会議事堂を守るとともに、命令を受けた軍の内部でも多くの軍人たちが消極的行動によって抵抗するなか、フェンスを乗り越えて迅速に議事に終結した国会議員がその解除を決議し、その目論みは霧散した。その後、憲法裁判所でこれを断罪し、大統領選挙においても政権交代を実現するなど、反動的な流れを押し戻している。非常事態の政治がグローバルに拡大する状況だからこそ、こうした対抗の力をトランスナショナルにつなげていく必要がある。

「グローバル地中海」(Global Mediterranean) という、いささか据わりの悪い表現も、こうした状況を踏まえて意味づけていく必要があるだろう。“Mediterranean”とは、語源的には陸地・大地 (terra) の中間 (medius) ということで、合わせて大地に囲まれた所といった意味となる。

かつて、この語源をはじめて知ったとき、私はユーラシア大陸の東側、日本列島の西側に広がる海、「日本海」とも「東海」とも呼ばれる海もまたひとつの「地中海」だと思ったことがある（日本列島で朝鮮半島のことを関係論的に研究している私がこのプロジェクトに参加しているのも、そうした視点で理解してみたこともある）。ここでは、さらにここから地形的要素も外して大胆に読み替え、「大国権力のあいだ」と解釈したい。すると *Global Mediterranean* とは「グローバル・パワーのあいだ」と読み替えらえる。デヴィッド・グレーバーがかつて民主主義は「あいだの空間」(spaces in between) から生ずると述べたことを想起しながら希望を込めて言うなら、グローバル・パワーに対抗する力の源泉は、より大きなパワーから来るのではなく、その狭間の位置（決して小さなものではない）から生ずるのである。本誌はその誌名どおり、そうした力と動きの「交差点」(intersection) たらんとするものである。

本号の内容もまたそれにふさわしいものであると自負している。

最初の3本は、2025年1月28-29日にブリュッセル自由大学（ULB）と同志社大学都市共生研究センター（MICCS）の共催で開いた国際シンポジウム“Colonial Legacies, Racist Discrimination: Belgo-Japanese Dialogues”（植民地主義の遺産と人種差別：ベルギーと日本の対話）の報告原稿である。このシンポジウムのホスト役を担った Abdellali Hajjat は、もともとパリ・ナンテール大学で教鞭を執っていたが、フランスで高まるレイシズムから逃れるように ULB へと研究拠点を移した。そうしたホストのもと、フラマン語地帯のフランス語飛び地のような場で、レイシズムとコロニアリズムに関するシンポジウムを開催したことは、歴史的に位置づけてみる価値もあるできごとだったように思われる。

1日目は「西洋世界における反アジア人レイシズム」、2日目は「植民地主義の遺産」をそれぞれ主題とし、ULB と MICCS の研究者が発表をおこなった。南川文里の報告文「アジア系アメリカ人における人種、能力主義、ディアスポラ保守主義：トランプ時代の反アフターマティブ・アクション運動」はその1日目、私（板垣竜太）の報告文「フマニタスとアントロポスをこえて：日本の大学における植民地人骨の返還をめぐる」と「人間／動物の境界を動員する：ヴィーガン・ナショナリズムとイスラエルで進行中の『対テロ戦争』の批判的分析」は2日目に発表されたものである。内容はここで要約しないが、2日間にわたり朝から晩まで尽きない議論が交わされたことを明記しておきたい。

それにつづく2本の翻訳は、それぞれ大西洋の西側と東側で、植民地／近代世界によって周辺化されてきた存在を出発点に展開された批判的知を紹介するものである。鈴木尠生の解説と翻訳による María Lugones の「植民地／近代ジェンダーシステム」論は、かつて colonial modernity 論への批判的介入をベースに博士論文を書いた私としては、ジェンダー概念そのものを「植民地／近代」の産物として捉え直す戦略に興味を惹かれないわけにはいかなかった。鈴木尠生と西尾善太のガイドによる Husein Inusah のアフリカ哲学論は、これまた私が

文化人類学出身者として、伝統本質主義に陥るような談義でもなければ、ただヨーロッパ発の概念の焼き直しでもないものはどう構築できるのかという容易に解決しがたい難問を回避してきたところ、アカン（ガーナ）の人々の現実のなかでつむがれた概念に寄り添いながらも、認識論上のあらゆる優位性を認めない相対主義を徹底しようとする方向性に、何かヒントのようなものがありそうだとの気にさせられた。

最後の2本は、現代のネオリベリズムが、歴史的なレイシズム、ナショナリズムなどどのように結びついているのかを論じたものとまとめられよう。保井啓志が翻訳した Haim Yacobi の講演は、ネオリベラルな権力の様態を帯びながらアパルトヘイト化が進むエルサレムを「ネオ・アパルトヘイト都市」と呼んだ。「非シオニストのユダヤ人（イスラエル人）」を自称する Yacobi は、エルサレムをネオ・アパルトヘイト都市として分析するだけにとどまらず、パレスチナ人とイスラエル人のバイナショナル都市とするもうひとつの道を提示している。米川尚樹が紹介する Christian Joppke の「ネオリベラル・ナショナリズム」論は、欧米諸国を中心として、ネオリベリズムと補完関係にあるナショナリズムが排外主義的な動きと連動している状況の理論化を試みた。特に市民権の厳格化をめぐる議論は、今日の日本社会でも進行中のことがらと残念ながら重なる。

「地中海」がそうであるように、また「交差点」がそうであるように、地球上のさまざまな場で闘い、考え、言語化した運動が本誌を通じて交わり、出会い、この嵐の時代における連帯形成の一助になれば幸いである。

